



## 第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成(学生・大学院生教育)

坂江, 渉  
板垣, 貴志  
河島, 真

---

**(Citation)**

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 11(平成24年度事業報告書):42-45

**(Issue Date)**

2013-03-31

**(Resource Type)**

report part

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005273>



の活動サイクルー被災地の過去・現在・未来を守る」と題する活動報告をおこなった。その後、添田仁が水損史料ワークショップを実演し、好評であった。

今後とも、生活復興と密接な関連をもつ資料保全の意義についての提起などを史料ネットとも協力しながらおこなっていききたい。

(文責・板垣貴志)

#### 第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

本年度はいくつかの団体に協力して、次のような震災資料に関する報告や意見交換会などを催した。

##### ① 2012年6月28日

地域連携センターおよび附属図書館の若手職員を対象とした意見交換会「震災文庫を学ぶ若手交流会」を人文学研究科 A 棟学生ホールにて開催した。奥村弘「大震災後の被災歴史資料と災害資料の保存」、佐々木和子「阪神・淡路大震災と資料保存」の報告を行い、附属図書館の司書らと交流を図った。

##### ② 2012年7月2日

地域連携センター、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会の主催による「第12回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」を人文学研究科 A 棟学生ホールにて開催した。これは S 科研グループが共催し、同科研「第14回地域歴史資料学研究会」を兼ねた。板垣貴志「書評：人と防災未来センター資料室『阪神・淡路大震災における住まいの再建』」、石原凌河「書評：伊丹市立博物館『伊丹からの発信(本文編)』」の報告を行った。

##### ③ 2012年7月31日～8月2日

東日本大震災の震災資料をめぐるヒアリング調査として、奥村弘・佐々木和子が岩手県大槌町・宮古市田老の現地調査を行い、岩手大学附属図書館、岩手県立図書館の職員の方々と意見交流を行った。

##### ④ 2012年8月22日

ICA の主催による ICA オーストラリア・ブリスベン大会にて、佐々木和子が「3月11日の東日本大震災後の協力と復興」と題して報告を行った。

##### ⑤ 2012年11月3日

神戸大学統合研究拠点にて開催された神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室シンポジウム「神戸から東北へ～いま伝えたいこと、そして学ぶこと～」にて、奥村弘・佐々木和子が「震災資料と被災歴史資料、二つの資料保全を考える」と題して報告を行った。

##### ⑥ 2012年11月22日～23日

東日本大震災の被災地である宮城県岩沼市の現地調査および宮城県図書館・仙台市立博物館のヒアリング調査を行い、東日本大震災資料の現状と課題について意見交換を行った。これは S 科研グループと地域連携センターが協力した。

##### ⑦ 2013年2月19日

地域連携センター、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会、S 科研グループの主催による「第13回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会」を人と防災未来センターにて開催した。これは S 科研グループの「第15回地域歴史資料学研究会」を兼ねた。長岡市立中央図書館文書史料室の田中洋史氏が「東日本大震災の避難所アーカイブはなぜ可能だったのか～長岡市立中央図書館文書資料室の取り組み～」と題して報告を行った。

##### ⑧ 2013年3月8日

東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館、岩手県立図書館、東北大学附属図書館、宮城県図書館、福島大学附属図書館、国立国会図書館、神戸大学附属図書館、阪神間の公共図書館の職員の方々と、「第2回被災地図書館との情報交換会」を開催し、意見交換を行った。

(文責・吉川圭太)

#### 第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成(学生・大学院生教育)

##### 地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年(2004)度から平成18年(2006)度まで、工学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援をうけ、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの

開発に取り組んできた（文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム）。この事業によって開発された教育プログラムが、平成19年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では、「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（前期課程）と「地域歴史遺産活用企画演習」（後期課程）の3科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。地域連携センターでは、平成19年度来、これら3つの科目の授業内容と素材を提供している。

3科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」（学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論A・B）は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義である。また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解説・展示活用などの実践的方法を学び取る専門的演習である。さらに「地域歴史遺産活用企画演習」は、その活用ための企画展示等を自治体関係者や地域住民と一緒に企画考案するような実践的演習である。

専門コースの学生・院生は、この3つの講義・演習をすべて履修し、専門外コースの学生・院生は、まず「地域歴史遺産活用演習」を取得し、自分自身の興味にしたがって「地域歴史遺産活用企画演習」を履修することが望ましいと指導された。以下、5年度目に入った各授業、演習の中身の概要について記す。なお本講義は、博物館学科目の「博物館資料保存論」としても開講された。

### **(1) 地域歴史遺産活用研究（地域歴史遺産保全活用基礎論A=前期、B=後期）**

#### **《前期・A》**

本年度から以下の3部立てに区分した講義をおこなった。

#### **第1部 地域社会の変容と地域歴史遺産**

- ① 04/13「序論（地域歴史遺産とはなにか）」（奥村弘・人文学研究科教授）
- ② /20「市町村合併の現状と課題」（河島真・人文学研究科准教授）
- ③ /27「博物館の現状と課題」（古市晃・人文学研究科准教授）
- ④ 05/11「自治体史と地域史」（村井良介・人文学研究科特命助教）

#### **第2部 新しい地域歴史資料学の構想**

- ⑤ /18「地域歴史資料学とはなにか」（板垣貴志

・人文学研究科特命助教）

- ⑥ /25「災害と地域歴史資料」（吉原大志学術推進研究員）
- ⑦ 06/01「今を伝える歴史資料—現代資料論一」（佐々木和子・地域連携研究員）
- ⑧ /08「地域文献資料の活用」（木村修二・地域連携研究員）
- ⑨ /15「企業史料と地域における企業」（石川道子・元地域連携研究員）

### **第3部 地域歴史遺産と地域歴史資料学を担う人々（地域歴史資料の保存と活用）**

- ⑩/22「地域社会の中で郷土史研究が果たしてきた役割」（添田仁・人文学研究科特命講師。ゲスト石川通敬氏）
- ⑪ /29「地域への愛着・関心とまちづくり」（前田結城・学術推進研究員。ゲスト上田脩・丹波市棚原自治会パワーアップ事業推進委員会事務局長）
- ⑫ 07/06「歴史遺産の活用と大学のはたす役割」（坂江渉・特命准教授）
- ⑬ /13「地域資料館のはたす役割」（辻川敦・尼崎市立地域研究史料館館長）
- ⑭ /20「地域歴史文化の担い手としての高校教員」（河島真・人文学研究科准教授）
- ⑮/27「まとめ—書くことの意味—」（市澤哲・人文学研究科教授。ゲスト大槻守・香寺町史研究会主宰）

#### **《後期・B》**

- ① 10/05「序論」（足立裕司・工学部教授）
- ② 10/12「文化財とは何か」（村上裕道・兵庫県教育委員会文化財室室長）
- ③ 10/19「歴史的環境の概念とその保全」（足立裕司・工学部教授）
- ④ 10/26「兵庫県内の地域の文化財—埋蔵文化財・文化的景観の保全—」（岡崎正雄・兵庫県立考古博物館社会教育推進専門員）
- ⑤ 11/02「兵庫県内の地域の文化財—寺社・民家を中心に—」（黒田龍二・工学部教授）
- ⑥ 11/09「兵庫県内の地域の文化財—近世地域絵画資料の保全と活用—」（明尾圭造・大阪商業大学商業史博物館首席学芸員、前芦屋市立美術博物館学芸課長）
- ⑦ 11/16「兵庫県内の地域の文化財—仏像を中心に—」（神戸佳文・兵庫県立歴史博物館学芸課長）

- ⑧ 11/30「兵庫県内の地域の文化財 -近代化遺産を中心に-」(足立裕司・工学部教授)
- ⑨ 12/07「地域にのこる農業遺産の保全・活用」(堀尾尚志・神戸大学農学部名誉教授)
- ⑩ 12/14「災害と美術工芸品の保存・修復」(内田俊秀・京都造形芸術大学芸術学部教授)
- ⑪ 12/21「歴史的建造物の保存・修復」(足立裕司・工学部教授)
- ⑫ 01/11「都市景観とまちづくり」(三輪康一・工学部准教授)
- ⑬ 01/18「博物館運営と歴史遺産の活用」(山地秀俊・経済経営研究所教授)
- ⑭ 01/25「障害者にやさしい歴史遺産の活用」(高田哲・医学部教授)

《全体を通じて》本年度も昨年度に引き続き、Aの講義を「地域文献史料」に関わる講義として、Bをそれ以外の「地域歴史遺産」、すなわち歴史的建築物・美術工芸・埋蔵文化財・農業遺産・都市景観等に関わる講義として編成した。

毎回の講義には、坂江がコーディネーター役として参加し、講師と受講生のやりとりや質疑応答等を受け持った。これにより全体としての講義の主旨やねらいがある程度伝わったと考えられる。前後期とも受講生は、50名前後であった(文学部・工学部・経済学部・経営学部・発達科学部など)。

なお基礎論 A の受講者に対して、個別連携事業における「聞き取り調査」活動へのボランティア参加を呼びかけたところ、1人の学生が応募し、明石市における「地域文化財普及・活用事業」へ参加した(2012年7月)。

(文責・坂江涉)

**(2) 地域歴史遺産活用演習(学部授業名は地域歴史遺産活用演習A、大学院文学研究科は「地域歴史遺産活用演習」、人文学研究科は「地域歴史遺産活用企画演習」)**

本演習は、地域歴史遺産の保全・活用を実践しうる地域リーダーの養成を目的としている。特に文献史料の取り扱い、整理、目録作成、解読をおこなう基礎的な能力を実践的に習得することを目的とした演習として、夏期と冬期に2回にわたり事前指導講義と合宿形式(集中講義)でおこなわれた。授業の履修者のほか、日本史研究室の院生・学生・センター研究員、大学附属図書館職員などの希望者も参加した。

**夏期**(2012年9月6日～8日)は、神戸大学篠山フィールドステーションにておこなわれた。篠山市日置地区で発見された中西家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解読した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。また、合宿中には、篠山市民センターにて、市民と学生との交流討論会(Rural Learning Network: 農の学び場)を開催し、受講学生にとっても篠山地域の方々と直に交流する貴重な場となった。

**冬期**(2013年2月17日～18日)は、三木市旧玉置家住宅にておこなわれた。三木市別所高木地区の近藤家文書を用い、整理と目録カードの作成方法を学びつつ、内容を解読した。合宿中に、受講学生は、旧玉置家住宅にて市民ボランティアがおこなっている襖下張り文書の剥離作業のレクチャーを受け、実際に剥離作業を体験した。最終日には、班ごとに整理した史料の内容を紹介し議論した。(文責・板垣貴志)

**地歴科教育論C**

「資質の高い教員養成推進プログラム」として採択され、2006～2007年度に実施した「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」以来継続している兵庫県立御影高校との連携事業を、今年度も引き続き実施した。センター関係教員が指導する「地歴科教育論C」では、御影高校総合人文コースの特色ある教科「グローバルスタディ」で「文学・歴史学セミナー」を選択した生徒11人の課題学習を指導することを通じて、地域文化を担う社会科・地歴科教員の実践力を養う授業を行った。

今年度は「ルミナリエ」「南京町」「神戸のファッション産業」「近代神戸展」の4つのテーマに分かれて研究を行った。このうち、「ルミナリエールミナリエの意味とこれから」の研究成果は、10月27日に開催された「高校生・大学生による神戸・阪神間地域学第4回発表大会」で銀賞受賞、兵庫県の地域コンクール高校論文部門で優秀賞受賞、さらに12月16日に開催された兵庫地理学協会シンポジウム(2012年度特別例会・神戸学院大学ポートアイランドキャンパス)のポスターセッションにも参加して好評を得た。

また、2月19日には、過去の受講生(大学院

博士前期課程)が、御影高校 2 年生の世界史 B で「ルネサンス文化史とルネサンス以降の文化の変化」について実習授業を行い、同校の地歴科教員の指導と講評を受けた。(文責・河島真)

## 第6章 平成24年度科学研究費助成金・ 基盤研究(S)

### 「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした 地域歴史資料学の構築」の研究支援

2009 年 4 月からスタートした上記テーマの科学研究は、今年度で 4 年目を迎えた。今年度はこれまで 3 年間の基礎研究、ならびに東日本大震災に際して進められた歴史資料保全活動から得られた知見を基礎として、新たな地域歴史資料学の構築に向けて各研究を展開し、その成果を論集としてまとめることを進めた。

今年度は、被災地フォーラムを 2 度開催した。フォーラム「新潟県中越地震から東日本大震災へ―被災歴史資料の保全・活用の新しい方法をさぐる―」(2012 年 11 月 10～11 日、新潟)では、災害時における地域歴史資料保全のための方法や体制のあり方、中山間部が抱える現状や地域歴史文化の形成について議論がなされた。フォーラム「大規模自然災害に備える―災害に強い地域歴史文化をつくるために―」(2013 年 3 月 2 日、岡山大学)では、平常時の史料防災の現状と課題を共有し、広域災害から効果的に歴史資料を保全する体制のあり方について議論がなされた。

地域歴史資料学の研究成果としては、主催の研究会を 6 度開催し、また外部の研究会と共催を 1 度行った。主催の研究会内容は、第 12 回地域歴史資料学研究会「地域歴史資料の活用と歴史学」(2012 年 6 月 14 日、神戸大学)、第 13 回地域歴史資料学研究会「水損資料救済取り扱いワークショップ」(2012 年 6 月 16～17 日、敦賀短期大学)、第 13 回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会(2013 年 2 月 19 日、本科研第 15 回地域歴史資料学研究会を兼ねる、人と防災未来センター)、平成 24 年度総括研究会(2013 年 3 月 3 日)、第 2 回被災地区図書館との情報交換会(2013 年 3 月 8 日、神戸大学)、第 16 回地域歴史資料学研究会「水に濡れた古文書と壊れた古書の修復ワークショップ」(2013 年 3 月 13 日、神戸大学)である。共催の研究会は、

第 12 回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会(2012 年 7 月 2 日、主催・地域連携センターほか、本科研第 14 回地域歴史資料学研究会を兼ねる、神戸大学)である。なお、東日本大震災の発生により計画変更を余儀なくされた、2004 年福井水害・2005 年台風 14 号の事例を中心とした大規模水害に関する研究は、上記第 13 回地域歴史資料学研究会として開催した。

国際的な情報発信として、8 月にオーストラリア・ブリスベンで開催された ICA 大会に参加し、大規模自然災害時の歴史資料保全活動に関する中間的な研究成果を発表するとともに、ICA 関係者と災害アーカイブの世界的展開について協議した。また、キャンベラのオーストラリア国立図書館では、東日本大震災にかかわるウェブ・アーカイブを進めている研究者と協議し、翌年の国際シンポジウムの準備を進めた。

東日本大震災の発生をうけて、本科研では分担者・協力者による被災歴史資料調査・保全(茨城県、長野県栄村などの被災資料)を支援した。また、阪神・淡路大震災や中越地震において蓄積された震災資料論を踏まえ、東日本大震災の震災資料に関する現地調査(宮城県岩沼市など)を行い、各種研究会で関係者などと情報交換し、今後の課題について議論した。

そのほかの研究活動としては、東日本大震災で被害を受けた歴史資料を効果的に保全していくための経験を積み、そこから析出された方法論を研究に反映させていくために、被災歴史資料をとりまく状況についてのデータ収集を継続した。また、市民と協同した地域歴史資料の保全・活用実践事例の調査(おもに兵庫県朝来市)などの研究を展開した。(文責・吉川圭太)

## 第7章 平成22年度～24年度特別研究 「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした 地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業

人文学研究科では、平成 22 年度～24 年度の 3 年間、文部科学省より特別経費の交付を受け、本センターを基軸にして、特別研究プロジェクト事業「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」を開始させた(そのための専任教員は坂江渉特命准教授・村井良介特命助教の 2 名のほか、2 年目に添田仁特命